

はじめに

「ホンマモン」を目指して

「川の日」ワークショップは4回目を迎えた。毎年、公開審査の場では“いい川”と“いい川づくり”の評価のものさしが問われる。募集要項におおむね評価の視点を明示してはいるが、参加者からは評価の仕方が不明である旨の疑問が呈されることがある。

公開審査という場での評価は、過去の経験を踏まえて文言化された評価の視点や基準を尊重しつつも、たゆまず、その年の提出プロジェクトとプレゼンテーションする関係者の発話と応答のプロセスにより、新しい評価のよりどころが見えてくるところに特徴がある。そこには、authorizeされた、権威化された評価ではなく、状況の中で先入観や既存の経験や抽象的概念を超える新しい発想や視点や方向が共感をもって合意できる「ホンマモン」の評価の中味が見え隠れしてくる。

「ホンマモン」とは‘authentic’、‘authority’が権威により思考が枠内にはめられるのに対し、‘authentic’は、状況づけられた対話の過程に真実や創造の側面の発見がある。両方の言葉に含まれる“auth”は、ラテン語で「(ホンマモン)を生み出す」という意味であり、‘author’とはホンマモンの物語を創る「作家」のことである。国家や上に立つ人や審査する側が「権威」を与える authorizeではなくて、審査する人も提出者も参加者も相互にやりとりしつつ、既存の知識の体系にとらわれない心を解き放たれる状況の中で、過去の習慣を全て切り離し、その場での発話・応答・体験を、空っぽの心で感動し吟味し洞察する、心本来の特徴が外に輝く瞬間が生成する。これは authentic な「ホンマモン」の知恵 ‘wisdom’ の始まりなのだ。

ワークショップ方式の公開審査は、そういう意味で“いい川”“いい川づくり”をめぐる権威的な尺度よりも、ホンマモンの知恵を相互発見する場なのだ。客観的に図示されたパネル表現と、主観的な発話と時にはパフォーマンス含みの多彩な表現のカップリングにより、みる人・きく人に何かを気づかせる。客観的データ・属性によって対象としての川をきりとるのではなく、市民・行政の主体的なかかわりにより生まれる経験世界を包括的に伝達する公開審査における発表と応答は、今までにない感情や気づきや知恵を創発させる。市民・行政の生き生きとした川へのかかわり・行為によって、人と川の相互作用・一体化を生み出し、川への思いが心の中にいっぱいみたまされる、‘mindfulness’の状況が人々の中に生成する。

「川の日」ワークショップは、このような人間と自然、人と川、主体と客体との多様なホンマモンの相互交流の創発現象をライブにキャッチする生彩ある現場である。もしそうだとしたら、過去4回の経験がどのような意味で「ホンマモン」の“いい川”“いい川づくり”をめぐる人々の思いの広がりをもたしているのかについて、客観的に評価してみる必要がある。そうした反省と評価と洞察によって得られる成果は、これからの「川の日」ワークショップの進め方と、“いい川”“いい川づくり”の実践の深化と広がりにも有効な知見をもたらすのではないだろうか。

ホンマモンをさぐりあてる、開かれたプロセスを共に歩みつづけていきたい。そのことは、川の領域だけではなく、わが国のその他の公共事業やまち育ての領域にも共通の創造的方法を示唆するものとなろう。

千葉大学工学部都市環境システム学科教授
「川の日」ワークショップ・総合コーディネーター
延藤 安弘